人の子の権威に関する論議

ルカ福音書20:1-8（新改訳2017訳）

20:1 ある日、イエスが宮で人々を教え、福音を宣べ伝えておられると、祭司長たちと律法学者たちが長老たちと一緒にやって来て、
20:2 イエスに言った。「何の権威によって、これらのことをしているのか、あなたにその権威を授けたのはだれなのか、教えてくれませんか。」
20:3 イエスは彼らに答えられた。「わたしも一言尋ねましょう。それに答えなさい。
20:4 ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか。」
20:5 すると、彼らは論じ合った。「もし天からと言えば、どうしてヨハネを信じなかったのかと言うだろう。
20:6 だが、もし人からと言えば、民はみな私たちを石で打ち殺すだろう。ヨハネは預言者だと確信しているのだから。」
20:7 そこで、「どこから来たのか知りません」と答えた。
20:8 するとイエスは彼らに言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」

【祈りながら考えよう】

（１）今日の並行記事から、マタイ、マルコ、ルカ福音書のそれぞれの特徴を簡単に説明して下さい。
（２）自分を陥れようとする意図をもっての質問に、主イエスはどのように答えましたか。
（３）ヨハネのバプテスマは天から来たと信じたら、その結果はどうなりますか。

【解　説】

（１）受難週三日目の出来事

日曜日に、イエスはろばの子に乗ってエルサレムに入られた。そして毎日、イエスはエルサレムにあって教えられた。
月曜日には、神殿を清めることをなさった。神殿の中で商人たちが売り買いをしているさまを見て、イエスは商人を追い出し、両替人の台をひっくり返し、怒りの姿をもって宮きよめをなさった。
その翌日が、今日の学びの出来事があった。《ある日》というのは、受難週の第３日目、火曜日のことである。
今日の並行記事がマルコ福音書にも、マタイ福音書にもあるから、読んでおこう。

《マルコ11章27節から33節》

11:27 彼らは再びエルサレムに来た。イエスが宮の中を歩いておられると、祭司長たち、律法学者たち、長老たちがやって来て、
11:28 こう言った。「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたに、これらのことをする権威を授けたのですか。」
11:29 イエスは彼らに言われた。「わたしも一言尋ねましょう。それに答えなさい。そうしたら、何の権威によってこれらのことをしているのか、わたしも言いましょう。
11:30 ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか。わたしに答えなさい。」
11:31 すると、彼らは論じ合った。「もし、天から来たと言えば、それならなぜ、ヨハネを信じなかったのかと言うだろう。
11:32 だが、人から出たと言えば――。」彼らは群衆を恐れていた。人々がみな、ヨハネは確かに預言者だと思っていたからである。
11:33 そこで、彼らはイエスに、「分かりません」と答えた。するとイエスは彼らに言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」

《マタイ21章23節から27節》

21:23 それからイエスが宮に入って教えておられると、祭司長たちや民の長老たちがイエスのもとに来て言った。「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたにその権威を授けたのですか。」
21:24 イエスは彼らに答えられた。「わたしも一言尋ねましょう。それにあなたがたが答えるなら、わたしも、何の権威によってこれらのことをしているのか言いましょう。
21:25 ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか、それとも人からですか。」すると彼らは論じ合った。「もし天からと言えば、それならなぜヨハネを信じなかったのかと言うだろう。
21:26 だが、もし人から出たと言えば、群衆が怖い。彼らはみなヨハネを預言者と思っているのだから。」
21:27 そこで彼らはイエスに「分かりません」と答えた。イエスもまた、彼らにこう言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。

（２）３つの福音書の特色

３つの福音書を読んでみると、同じことを記しているが、少しずつ重点の置き方が違っている。３つの福音書を合わせて見ると、より一層イエスのことが分かる。その違いをここに挙げて見る。
ルカ福音書では、この問答が行われた時は、《イエスが宮で人々を教え、福音を宣べ伝えておられる》時であった。
マタイ福音書を見ると、《それからイエスが宮に入って教えておられると、祭司長たちや民の長老たちがイエスのもとに来て言った》とある。
マルコ福音書を見ると、《彼らは再びエルサレムに来た。イエスが宮の中を歩いておられると》となっている。少しずつ違いがある。
マタイとルカとは似ている。ルカの方は、福音を宣べ伝えるということが付け加えている。マルコでは、《宮の中を歩いておられると》と違う表現になっている。これによってマタイ、マルコ、ルカの特色がよく分かる。
マタイ福音書は、イエスの「教え」ということに重点が置かれている。マタイには「山上の垂訓」という箇所がある。５章から７章まで、山上におけるイエスの「教え」が集められている。教えだけではなく、イエスが様々な事をなさったこともあるが、特に教えということに重点がある。
マルコ福音書は、イエスがいかに働かれたか、その行動が特色をなしている。マルコはその事に心してイエスを見ていたようである。マルコはイエスの直接の弟子ではない。ペテロの弟子である。パウロの助手でもあった。ペテロはイエスの代表的な弟子である。イエスに近く行動し、見聞きした人である。
ペテロが見聞きしたところを、マルコがそのまま書いた。端的な書き方である。イエスの行動的な面が書かれている。だからこの場合にも、《イエスが宮の中を歩いておられると》というように、イエスの行動的な面が表現されている。
ルカ福音書を見ると、ルカもイエスの直接の弟子ではない。ルカはパウロの弟子であり、医者であった。パウロから大きな影響を受けた人である。パウロの（福音だけ、信仰だけ、キリストだけ、ただキリストによって救われるという）、罪人に対する喜ばしい福音を深く身に受けていた人である。だからイエスについての材料を集め、これを書き表す時にルカが心したのは、福音的な面である。《イエスが宮で人々を教え、福音を宣べ伝えておられると》と言われている。

（３）イエスの教えと行動は常に１つ

教えと言えば、孔子の教え、孟子の教え、あるいは釈迦の教えがある。そういった人間の教えがある。道徳的な教え、律法的な教えがある。しかし、イエスの教えはそういう教えとは全く異なる。人間に教えて、こうしなさい、こういうふうに自分でしっかりやりなさいというような、単なる教えではない。
イエスの教えは救いの教えである。どうしたら救われるかという教えである。すなわち福音である。私たち、自分の力で自分を救うことのできない弱い罪人にとって、ただ救っていただくということがなければ救われない。そのように思っていない人が多くいる。
しかし、自分自身の真相を知った者は、パウロのように自分自身に絶望するしかない。だからイエス・キリストは、そのような人間に対して無条件に救おうとする神の救いを私たちに教えて下った。教えと同時に、福音を宣べ伝えておられる。こういう所にルカらしい見方が見られる。
マルコだけが何となく違うように思われる。《宮の中を歩いておられると》と。しかし、事は同じである。イエスの教えは、単に机の前に座って教える教えではない、イエスご自身の行動、働きの中の出来事である。
イエスの教えはどこまでも、悩める人のいる所、救いを必要とする人の所に行って教える教えである。イエスの教えはそのまま行動であり、働きである。働きの中に教え、教えつつ働かれる。教えと行動とは常に１つであった。

（４）イエスを敵とするサンヘドリン

ある日、イエスが宮で人々を教え、福音を宣べ伝えておられると、祭司長たちと律法学者たちが長老たちと一緒にやって来て

イエスが宮きよめをなさったその時から、イエスの敵として現れたのが「祭司長」という存在である。それまではイエスに対抗する人々は、もっぱら律法学者、パリサイ人であった。しかし、この時から祭司長がその仲間に入ってきた。

祭司長というのは宮で働いている祭司の長であり、何人もいる。
　祭司長、律法学者、長老と、３種類の人をあげると、これはユダヤの最高権威であったサンヘドリンを構成する議員たちである。サンヘドリンは最高裁判所のような、ユダヤの最高議会である。
　祭司長、律法学者、長老、合わせて70人がサンヘドリンを構成する議員たちの数である。それに大祭司が議長になって、71人である。事は祭司長が加わることによって、このサンヘドリンの問題となってきた。
　長老たちは民を代表する人々である。イエスを十字架からおろして、その遺体を請い受けて、自分が備えていた新しい墓に葬ったアリマタヤのヨセフは、サンヘドリンの議員である長老の一人である。イエスを尊敬していたが、公にイエスを信じることを告白することができず、密かにイエスを尊敬し、慕っていた。
　また、ヨハネ福音書３章に出てくるニコデモはパリサイ人で律法学者であり、サンヘドリンの議員の一人であった。これまたその身分から、公にイエスを信じる告白が出来なく、疑問の点を夜、密かにイエスの所に来て尋ねるという存在であった。イエスが十字架に掛かった時に、アリマタヤのヨセフと共に、イエスの遺体を埋葬する働きに参加した。
　この時からイエスに対抗する者は、祭司長、律法学者、長老たち、すなわちユダヤ人を代表する人々、サンヘドリンがイエスの敵となった。

（５）権威の所在

イエスに言った。「何の権威によって、これらのことをしているのか、あなたにその権威を授けたのはだれなのか、教えてくれませんか。」

　宮で商売することを、祭司たちは黙認していた。またユダヤの最高権威であるサンヘドリンもこれを黙認していた。
　イエスが神殿を清められたということは、どう見ても正しいことである。神殿でいわゆる犠牲の供え物にする牛や羊や鳩、そんなものを売り買いするということは、神殿の律法において禁じられていること。それをいつの間にか祭司たちが神殿を私物化して、その商人たちにそういう場を与えている。
　そこで売っている品物は祭壇に捧げる供え物なのだから、外で整えないで中で整えられたらその方がいいではないかということで、いつの間にか許し、また同時に商人からその上前をはねていく。そして見て見ぬふりをし、不正が公然と行われていた。
　イエスはその不正を正すことをなさった。なされた事は正しいこと。しかし、サンヘドリンの議員たちは自分たちこそユダヤの宗教的権威を持っているのだと自負し、自分たちの縄張り荒らしとでも思った。自分たちの沽券に関わるイエスの行動に対して黙っていることが出来ず、挑戦してきた。この自分たちに何の断りもなしに神殿聖別やそこで教えているのかと言いたかったわけである。
　物事を尋ねる場合、二種類の質問がある。相手を陥れるための質問がある。もう1つは本当に自分が分からないからその事を分かりたいために質問する質問がある。
　イエスは本当に分かりたくて尋ねる者に対しては、手を取って分かるまで導かれるお方である。しかし、イエスを陥れるためにする質問に対しては、イエスは決して当たり前のお答えをしてはおられない。

（６）バプテスマのヨハネの権威

イエスは彼らに答えられた。「わたしも一言尋ねましょう。それに答えなさい。ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか。」

　自分を陥れるがための質問には、いくら説明しても聞くわけはない。そんな質問に対しては、イエスはまともに答えない。自分の方から質問を出された。それに答えるなら、ご自分もその質問に答えようと言われた。まことに巧みな答え方である。イエスの質問はこうである。バプテスマのヨハネがイエス様より一足先に現れて、悔い改めの説教をし、悔い改めた者にそのしるしとしてバプテスマを施した。そのことである。
　《**ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか**》
　ヨハネはイエスより半年ばかり先にこの世に生まれ、イエスがキリストとしての活動を始められる少し前に、ユダヤの荒野に現れて、悔い改めの説教を始めた。人々に神に逆らっている罪を認めさせ、神に立ち返る悔い改めを迫った。
　悔い改める者にはバプテスマを施した。ヨハネは、私は水であなたがたにバプテスマを施すが、私より後に来るお方は私より力があるお方で、私はそのお方のくつのひもを解く値打ちもない。そのお方は聖霊と火によってバプテスマを施されると、キリストを証ししている。マタイ３章、ルカ３章、そしてヨハネ１章後半に記されている。

（７）イエスの先駆者ヨハネ

　バプテスマのヨハネはイエスの先駆者として、イエスの救いが来るその備えとしてその直前に現れた旧約最後の預言者、旧約の幕を閉じる重大な役割を神から授かって遣わされた預言者である。
　イエスは言われる《**女の産んだ者の中で、ヨハネより大きい人物はいない**》。また《**預言者以上の者である**》
　その存在、働き等から見れば、旧約のイザヤ、エレミヤ、あるいはサムエルとかいった預言者よりもスケールは小さいように見えるが、彼が担当させられた働き、これは旧約預言者のだれも担うことの出来なかった重大な立場である。
　バプテスマのヨハネのバプテスマの権威は天からであると認め、悔い改めるなら、必ずそこに立っておられるイエス・キリストの救いを受け取ることができる。

（８）ヨハネを否定する者

彼らは論じ合った。「もし天からと言えば、どうしてヨハネを信じなかったのかと言うだろう」

　彼らは、バプテスマのヨハネがいかに立派な人物であるか知っていたはずである。パリサイ派に属する当時の歴史家ヨセフォスですら、バプテスマのヨハネがいかに立派な預言者であったかということについて記している（**ユダヤ人古代史**〔18･5･2〕）。だから、ユダヤ人議会の議員たちがそれを知らないはずはない。
　しかし、バプテスマのヨハネの説教、彼が授けていたバプテスマの権威を認めてしまうと、彼らとしては困ったことになってしまう。というのは、バプテスマのヨハネは、主イエスを救い主として証ししていたからである。
　そういうことになれば自分たちの立場が危うくなる。主イエスは彼らの急所を突かれたのである。彼らは今度は窮地に立たざるを得なくなってしまった。
　もしこれを神からの権威と認めたら、バプテスマのヨハネの語った救い主は主イエスであるというのに、なぜ信じなかったのかということになり、またそれを人からの権威だと言えば、民はみなバプテスマのヨハネを神の預言者だと信じているので、《**私たちを石で打ち殺すだろう**》と考えた。
　困り果てた彼らは、主イエスを追い詰めるはずであったのが、今度は逆に自分たちが追い詰められる格好になり、《**どこから来たのか知りません**》と言って、ごまかそうとした。しかし、真理を真面目に求めるわけではなく、人を陥れるような魂胆の人たちに対しては、主イエスは答える必要がないと言って、打ち切られた。

（９）罪の悔い改めを経ているか

　ここで私たちは考えなければならない。人ごとではない。私たち自身本当にバプテスマのヨハネを、神から遣わされて来たキリストの先駆者として、その悔い改めの説教を聞いた者であるのか。自分の罪を認めて悔い改めたか。そうであれば、神から受けるべき罪の刑罰を私たちに代わって全部受け取って死に、罪の赦しを与え、神の子と呼んで下さるキリストの救いは、私たちのものである。
　そうであれば、もはや私たちは自分で自分のことを、くよくよしない、自分の弱さを気にしない、自分の出来ないことも問題ではない。もう全部キリストで解決してしまっているからである。私たちの行く手にあるのは、天地万有の造り主なる神の子として、あらゆる神の扱いを受けてゆくということがあるだけである。
　神は、暗い罪につながる古い私は、キリストにおいて十字架に死んだものと見て下さる。そしてキリストにあるいのちにおいて新しく生まれ変わった私が、神の前に覚えられていくだけである。
　しかし、キリストを信じていると言いながら、なお年中自分のことで、くよくよしている人はいないか。そんな人はこのバプテスマのヨハネを天よりの人として、ヨハネの悔い改めのバプテスマを経ていない人である。まだ何か自分に取り柄があるみたいに思っている。だから出来ない自分を年中見つめて、くよくよしているのではないか。

（10）人の権威で立つ者

わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません

　イエスが神殿聖別をなさった。祭司や祭司長たちが黙認し、不正を許してきた出来事を、イエスが正された。大工あがりのイエスのやるままにさせている。その悔しさの故に、何の権威でそれをするのかと問い詰めた。
　彼らにとって、イエスはラビの教育を受けた人ではない。ナザレの大工にすぎない、主は学位を取ったこともなく、会堂から派遣されておられたわけでもなかった。それでは何が主の資格を証明するのか。
　他人に教えを説いたり、宮きよめする《権威》を主に《授けたのはだれ》なのか。そういうことを前提として、彼らはイエスを陥れるために、この質問を持っていた。イエスの権威は人からのものではない、神からの権威である。
　「どこで資格をもらったのか。誰があなたを任命したのか」と質問をする人が未だにいる。誰かが福音の語り手として用いられていたとしても、有名な大学の神学部などで学んだことがないと、その人に「聖職」に就く資格があるかどうかが疑問視されることが、残念なことであるが、今日のキリスト教界でもある。。
　この箇所は、「神のみことばを教える時に必ず必要なのは、聖霊に満たされることである」ということを教えている。聖霊の満たしを受けて語る者は、この世の学位や人間が与える称号、栄誉にとらわれる必要はない。